

ディーター・ラムスのデザイン —スピーカーのための開口を考える—

内 田 祥 士
UCHIDA Yoshio

はじめに

既に、三年以上前のことになるのだが、2009年の5月から7月にかけて、東京都府中市にある府中市美術館で、「純粹なる形象 ディーター・ラムスの時代 —機能主義のデザイン再考—」という展覧会が開催された。当時、同美術館のホームページには、次の様な紹介文がアップされていた。

きのうと違う新しさを、さらなる変化を。そのような20世紀以来の近代化の波の中で、「変わらないこと」にこだわり続けた稀有なデザイナー、それがディーター・ラムスです。ラムスは1955年以来、ブラウン社（BRAUN）において40年以上にわたり500を超える製品をデザイン・監修してきました。ドイツの伝統に育まれた、機能に忠実であろうとするデザイン精神。その継承者であるラムスの手がけた品々は、限りなく不変であるからこそ今なお新鮮さを保ち、近年国際的な再評価がすすんでいます。

製品の企画から設計、製造、さらに広告にいたるまで、あらゆる開発プロセスにトータルな視点を向けたラムスはまた、企業のブランド価値を高めるコミュニケーション・デザインのパイオニアでもありました。

本展では、製品と日本初公開のスケッチ、プロトタイプ、モックアップなどを含め300点以上の資料によってラムスのデザイン哲学を解明するとともに、「モダニズム」や「近代化」の潮流を振り返り、「デザインとは何か」というより大きなテーマに迫ります。ディーター・ラムスとの出会いは、21世紀に生きる消費者、あるいは生産者にとって、あらためてデザインの課題と可能性を考える機会となることでしょう。

「機能主義のデザイン」との指摘にも、「『変わらないこと』にこだわり続けた稀有なデザイナー」との指摘にも「機能に忠実であろうとするデザイン精神」との指摘にも異論は無い。しかし、一般論として、機能主義のデザインが、即ち、変らないデザインであると言うなら、必ずしもそうではない。会場に並べられた製品群のデザインは、今でも実に新鮮であったが、例えば一連の電気製品が、今日に於いて尚機能的に優れているかと言えば必ずしもそう考えられては無い以上、当時の機能を前提としたデザインが今日に於いて尚機能的であるとは言い難いはずだ。従って、魅力的なデザインの根拠

を「機能主義のデザイン」との定義で明らかに出来るかといえば、決してそうではない。今見ても、その魅力が「変わらないこと」の背景には、機能主義では説明出来ない何物かが存在するその様に考えた方が自然だろう。本論の目的は、彼のデザインの、ささやか一面に触れつつ、その魅力の一端を明らかにすることにある。では、本題に入りたい。

論理或は計画

写真(1)は、先の紹介文に添えられていたもので、ブラウン社のTP1ポータブルラジオ・レコードプレーヤーである。1959年とあるから、氏の若かりし日の作品である。本論で注目するのは、この製品の左上のスピーカーの為の円形の開口部である。正確には、スピーカーのカバー部分に設けられた開口デザインである。その形状からも明らかな様に、この背後には円形のスピーカーが隠されている。小さな開口が同心円上に概ね同じ密度で配置されているのも、音を通すための穴が円形である理由も、間違いなくスピーカーが円形であることの反映である。この形状と配置は、円形のスピーカーの前に同じく円形の均質な開口を、素材の強度が許す限り設けようとしたラムズの思いの結晶であったに違いない。ここでは、論点を明確にするために、小さな開口を円形とすること、全体の中心に開口を配置すること、同じ開口の径の円を同心円上に同じ間隔で順次配列することについては、予め決っていたと考えてみよう。また、各開口間の距離が概ね開口の直径と同じである点も、例えば、素材の強度から予め決められていたとしよう。「ささやか一面に触れつつ」と申し上げた所以である。

今、仮に開口の直径を a とすれば、デザインの条件或は前提は、まず中心に直径 a の円を描き、その周りに同心円上に、同じく直径 a の円を、相互の開口間距離が a となる様に次々と並べていく作業ということになる。この原則に従えば、最初の円を描くと、次の円の中心は、図(1)左の様に、半径 $2a$ の円周上に並ぶことになる。同図中央はその原則に従って、最初の同心円上に直径 a の円を描いたものであるが、当然のことながら、各円の配置は、最初の円を中心に正六角形に並ぶことになる。次の同心円の半径は最初の同心円の半径に $2a$ を加えたものになる。同図右がその同心円である。以後の作業は、判で押した様に、前の同心円の半径に機械的に $2a$ を加えた半径の円周上に相互の開口距離が a となる様に円を並べる作業となる。実に明確で分かりやすく、個性や好みの入り込む余地を残さない、機能的なデザインである。正に「純粹なる形象 ディーター・ラムスの時代 --機能主義のデザイン再考--」を象徴するデザインである。誰でもそう考えるに違いない。私も異論はない。ここに言うところの「機能」とは、円形のスピーカーから出来るだけ効率的に音を引出しつつも、構造的には些か脆弱なスピーカーを守るに充分なだけの剛性と強度をカバーから奪わないことであり、「主義」とは、この機能を背景として定められた論理を指していると言って良いだろう。その論理を取って具体的に記せば、「直径 a の円を描き、その周りに同心円上に、同じく直径 a の円を相互の開口間距離が a となる様に次々と並べていく」という計画と言うことになる。論理的に構築された計画と具体的なデザインが一致しているという点に於いて、このデザインには、確かに、普遍性がある。しかし、それだけでは、『「変わらないこと」にこだわり続けた稀有なデザイナー、それがディーター・ラムスです』の根拠の説明としては不十分である。少なくとも、私はそう考える。

ラムズのデザイン

論理としての計画と現実としてのデザインとの間には、思いの外、大きな溝がある。普遍性への思いを胸に論理を構築しようとする「計画」と、個別解の中に普遍性を見出そうとする「デザイン」とが矛盾無く両立することは無いと言った方が事実に近いだろう。確かに、図(1)を見る限り実に論理的に出来ている様に見える。しかし、論理とデザインが整合するのは、実は此処までなのである。3つ目の同心円から事態は一変する。新しい同心円に内接する正多角形の1辺の長さは、最早正確に「a」にはならない。割り切れないからである。ここから先に、正確な意味での正解は存在しない。これを論理的破綻或は計画の限界と捉えるか、デザインの可能性と捉えるかは、意見が分かれるだろう。計画理論の側に立てば、正解は人知を超えたところにあり、現実には存在しないので、デザインという近似値で妥協せざる得ないとの見解になるし、デザインの側から見れば、論理は既に破綻しておりデザインにこそ可能性があるとの見解になる。勿論、私は後者に一票を投じたい。

図(2)を見て頂きたい。6種類のスピーカーカバーは何れも「直径aの円を描き、その周りに同心円上に、同じく直径aの円を相互の開口間距離がaとなる様に次々と並べていく」という計画に対するデザインである。但し、「相互の開口間距離がaとなる様に」は「相互の開口間距離が概ねaとなる様に」に改められている。ここで、興味深いのは、「相互の開口間距離がaとなる様に」という解答が存在しなくなった途端、「概ねa」とした途端、直ちに無限のパターンが成立してしまうという事実である。先に示した私の立場から申し上げれば、論理的な破綻がデザイン成立の契機となっているという事実である。

ここで、読者各位に一つ質問をさせて頂きたい。ラムズのデザインは、この中のどれだろうか。いや、もう少し意地悪く、ここに彼のデザインは存在するか、と。最早、これらのデザインの差異の根拠は「相互の開口間距離がaとなる様に」でも「相互の開口間距離が概ねaとなる様に」でも説明はつかない。ならば、もう一步、深いところに彼のデザインの根拠が存在することを知り、そこに彼の「変わらないこと」へのこだわりを見出せる者でなければ、正解を言い当てることは出来ないことになる。それは何か、私達はそれを指摘出来るか、という問題提起である。

私は、次の様に考える。恐らく、「相互の開口間距離が概ねaとなる様」なデザインを、この様に幾つも並べて、選んだに違いないと。その選択には、例えば、管体が直方体なのだから、同心円上の配列に垂直水平の方向性が表れることには寛容であって良いだろう、しかし、それは淡い印象でなければならぬ、勿論、それ以外の方向性は出来るだけ排除し、同心円的な配置こそが意識に上るよう配慮しなければならない、そんな感覚ではなかったかと。ここで私が申し上げたいのは、その正否ではない。最終的な決定根拠が、極めて感覚的で、論理的ではないと推察されるという点の方である。

思い出して頂きたい。全ては「直径aの円を描き、その周りに同心円上に、同じく直径aの円を相互の開口間距離がaとなる様に次々と並べていく」という実に単純で解りやすい論理から、何の思考も不要な迄に簡明な計画から始まったのである。その時、そこに具体的な解答が無いという事実を、現実化するにはデザインが必要であるという現実を、私達は理解していただろうか。或は、それが、実際には、実現不可能な計画であるという事を、私達は認識していただろうか。寧ろ、その簡明な論理性を前にして、私達の思考は停止してはいなかっただろうか。少しでも描いてみれば直ちに明らかになることなのだが、この計画に沿うパターンは、実は、無限に存在する。従って、特定のデザイン

に到達するには、気の遠くなるような検討とそれを支える強靱な美意識が、些細な差異から優れたデザインを選び出す確固たる判断力が、必要であったはずである。私には、これ以上説明することは出来ないが、写真(1)を見る限り、そうした検討と判断が、あらゆる部位のあらゆる形体のあらゆる納まりに対して感じられること迄は、確信を持って指摘することが出来る。今は只、その強靱な美意識と確固たる判断力に、心から敬意を表するばかりである。

謝辞

プロダクトデザインの世界を私に御教授下さった天沼昭彦先生に、また、このささやかな検討を、活字にして残すことを進めてくれた同僚の北真吾氏に、心から感謝します。



写真(1) TP1ポータブルラジオ・レコードプレーヤー 1959年 ブラウン社 Photo: BRAUN GmbH

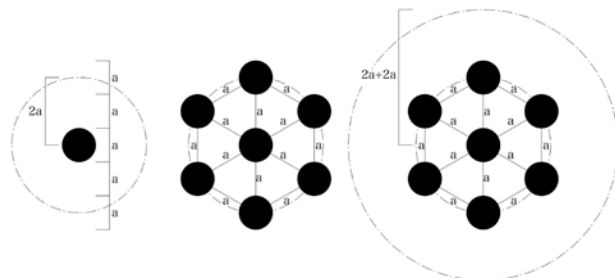


図1

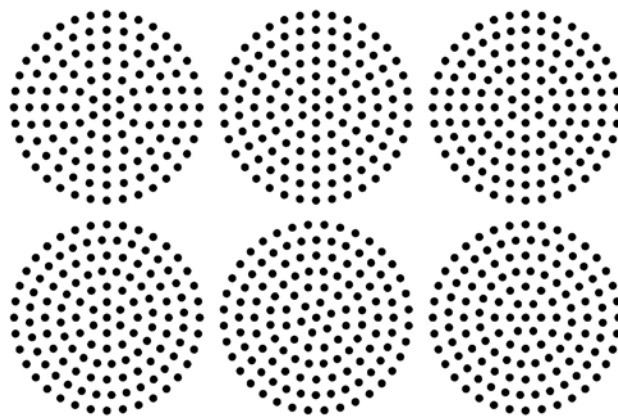


図2

